

応募者の皆様へ

## 必読!! 教育論文を書くとき、絶対押さえておきたい 10のポイント

審査委員会は、論文作成の参考として、審査の観点を含むいくつかのポイントをお示ししています。参考にさせていただければ幸いです。

### 1 論文の概要、目次、頁、資料番号、記号等の形式面は整っているか

時々、論文の「概要」が付いてない、目次や頁がない、論述の中で用いた資料の名称・番号が文末の【注】のところと違っている、論述や検証に不必要な資料が多過ぎたり、反対に極端に少なく、何を根拠に何を参考に書いているのか分からなかったりする論文が見受けられます。内容さえよければ形式面の不備は許されるというわけにはいきません。論文は他人に自分の研究を読んで理解して貰うコミュニケーションの手段ですから形式面の約束事があります。それを守ることも読んで貰うための条件です。例えば、図や表などの資料のタイトル名についてはゴシック体で、表の場合は表の上（センタリング）に、図や資料は下に掲載するのが一般的です。また、図表・資料が小さく縮小され、判読できない論文が見受けられます。見やすい適切な大きさにすることが大切です。必ずチェックしてから提出するようにしてください。

### 2 研究テーマは読み手を論文理解へ導く大事な窓口

#### ～研究のポイントを簡潔明瞭に

研究テーマは、この論文作成のプロセスが読み手に伝わるように簡潔に表現したものです。テーマが大きすぎると意味がよくわからないということにもなります。

ですから、適当に付ければよいというものではなく、自分の研究を端的にアピールできるテーマになるよう工夫してください。研究の目的や内容、方法が明確になることが大切です。

<例> 数学的な見方や考え方を育てる、数学科指導の在り方  
～「かけ算」における学び合い活動の工夫～

ここでは、「数学的な見方や考え方を育てる」が目的、「数学科指導の在り方」が内容、「『かけ算』における学び合い活動の工夫」が方法を示しており、何をどうしようとする研究であるかがよくわかるテーマになっています。また、「高める」とか「深める」という言葉もよく使われますが、どうなったら「高まった」、「深まった」ことになるのか、ある程度想定した上で使わないと、検証する段階で判断すること

が難しくなってしまいますので、注意が必要です。同様に、「確かな」や「豊かな」、「生き生きと」、「楽しく」といった言葉もあります。

### 3 「主題設定の理由」を書いてみる～これは大事な仕事

研究論文を書く場合、大体次のようなプロセスを踏むことになると思います。

まず、例えば授業や生徒指導などで取り組む必要がある問題を1つ取り上げます。できるだけ大きな問題ではなく、具体的で絞った問題がよいと思います。まず、なぜその問題を取り上げたのか、問題だと考える児童生徒の現状、考えられる背景と原因・理由、これまでの自分や学校の取り組みとそこで得られた知見、解決の見通し、関連する先行研究・諸答申類等の事前サーベイと、それを通して考えた本研究の位置付けと意義を書きます。以上を簡潔にまとめたものが「主題設定の理由」です。

主題設定の理由は、研究テーマに対する先生方のこだわりの強さ、理解の深さ・広さを読み手に伝えるものです。この点については、これまでの最優秀賞、優秀賞のいずれの論文も参考になる筈です。いずれも、主題設定の理由が形だけでなく児童生徒の実態にしっかり向き合いながら研究を進めていったことが読み取れるものです。特に最優秀論文は、研究論文集に全文が掲載されていますので、参考にしてください。

次に、研究の見通し（仮説…後述）を立て、それをどのような手立てと手順で検証するかという実践研究の全体的な道筋（「研究計画」に相当）を立てます。その後は、研究計画に基づいて、検証のための授業実践を行います。結果の整理、仮説が検証されたかどうかの評価へと進みます。ここで何度か仮説の見直しと検証、さらに仮説の見直しと検証へと進むと思います。この「行きつ戻りつ」を繰り返すことで研究は熟度が上がります。

### 4 研究の間口（目的、対象、内容）を狭く絞る……仮説が形だけでなく仮説らしくなる

応募された論文のほとんどは、「仮説」という用語を用い、しかもそのスタイルはすべて「もしもAならばXであろう」というスタイルとなっています。ただし、「仮説」という用語を使うに当たっては、形だけ仮説のスタイルをとるのではなく、次のことに留意して欲しいと思います。

厳密な実証が要求される自然科学では、「もしもAならばXである」という仮説を立てます。仮説を証明するのは、検証に用いるデータの信頼性と検証の手続きの厳密さです。

しかし、教育研究では研究対象が人間や社会（集団）に関わることですから非常に多様で変化するものです。ひとつの事象にも様々な要因が複雑に関わり合っています。それだけにひとつの事象の原因と結果の関係ははっきりさせられない、その

ため仮説は「AならばXである」とは言えないので、「Xであろう」と「程度の差はあるが多分Xだと言えるだろう」と「曖昧さ」を断っているのです。つまり、教育研究で仮説を高い信頼性で検証することは難しいということです。

しかし、問題はその先です。だからと言って、教育研究が曖昧で信頼性の低い研究でいい筈はありません。教育研究は児童生徒の成長発達に大きな責任を持つ教師が取り組む研究です。信頼に値する研究にすることが大事だと思います。ではどうするか。簡単に言えば、研究の間口（目的、対象、内容）を狭くすること、絞ること、自分が何を研究したいのか、何度も何度も考え、整理に整理を重ねて、より具体化していくことだと思います。主題設定の理由を考え、先行研究や関連文献・資料に目を通し、研究計画を立てる中でしだいに明確になってくる問題意識、それはもうかなり絞られた「研究のねらい」であって「仮説」としてもよいと思っています。

基本的には「〇〇において、〇〇を〇〇することによって、〇〇になるであろう」のように、「どのような場面や内容を設定し、どのような手立ての工夫をすれば、どのような変容が期待できるか」という形になるかと思っています。ここの部分を具体的にわかりやすく示すことが大切です。例えば、「『〇〇の領域において多様な見方ができるような題材を用いた学習課題を設定し、（ステップを踏んだ）〇〇→〇〇→〇〇という3つの過程を導入することで、〇〇が育つであろう』とし、さらに具体的な手立てとして2つの活動を大切にしたい」というような書き方になれば、わかりやすくなります。

## 5 仮説の実証授業は1回だけで終わらせず複数回で

近年少し気になっているのは、仮説を実証するための授業が1回だけという論文が増え、実践の蓄積が感じられる研究が減ってきたことです。研究に説得力を持たせる重要な要素のひとつは、継続的な実践による研究かどうかということもあると思います。PDCAサイクルを活用し、成果と課題を整理して改善策を考えたり、不足していること、新しく必要なことを見つけたり取り入れたりし、再度、計画し実践、検証することを繰り返すことで組織的、継続的な研究となり、教育活動の改善にもつながっていきます。

## 6 文章表現や論証に用いる用語の使い方は適切か

仮説の検証として児童生徒の行動の変化を記述する時、「子ども達が生き生きと活動するようになった」、「みんな楽しそうに取り組んでいた」等々、先生方の主観的な感想や評価を並べることで終わっていないか留意してほしいと思います。できるだけ多面的多角的な評価を工夫してください。

なお、客観的な評価をすぐにアンケート調査をすることだと考えるのは早計です。少人数の学級でのアンケート調査は、自分の実践を手軽に評価する手段として

活用することはあり得ますが、研究仮説の実証的な裏付けとして用いるのは慎重さが必要だと思えます。

## 7 参考文献・資料にも関心をもって欲しい。ネットからの引用には必ず出典のURLを

参考文献・資料は先生方が関心を持っているテーマを深掘りし、研究を進める上で大変役立ちます。この機会に触れた文献・資料を文末にまとめて載せて欲しいと思います。

また最近、ネットで検索して誰かが書いた論文、資料、あるいは審議会答申・報告等をコピー&ペーストする傾向が増えています。その場合には、必ず出典のURLとその最終閲覧日を明記してください。これは研究を発表する場合の大事な作法でありルールです。

## 8 自分の研究にキーワードを付ける

研究の「応募票」に、5つのキーワードを付けて頂くことにしています。理由は、キーワードを付けるだけで、まずは県内で同じ研究分野・テーマ・切り口に関心を持つ先生方の仲間づくりへと発展することへの期待があるためです。もうひとつ、キーワードを付けることを意識することで、常に論旨を整理しながら書こうとする意識付けにつながるからです。

## 9 県内で生じている新たな教育問題や教育課題への取り組みも

経済や情報通信のグローバル化、少子高齢化、過疎化、大きな災害、さらに現在も憂慮すべき感染症対策が続く中で、県内でもそれに対する教育面での様々な取り組みが出てきています。そうした取り組みを紹介する研究報告や論文にもこの弘済会の教育論文事業は積極的に支援したいと思っています。ぜひ積極的に応募して欲しいと期待しています。

## 10 その他

近年、AI（人工知能）を活用して論文等を作成するなどの事例があり、著作権侵害や誤情報、思考力低下への懸念が指摘されています。当会の教育論文におきましては、応募者自身が作成することを前提としています。応募者以外の作成が確認された場合は選考対象外となりますので十分にご留意ください。

(公益財団法人 日本教育公務員弘済会茨城支部 教育論文審査委員会)